

共同研究 ● アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学—参加・運動・ガバナンス (2009-2012)

今日、単線的な基準で自己診断し、目標を立てて自己研鑽に励み、その結果を他者に開示することを要求する「問題-解決」型の思考が跋扈している(春日 2007)。その結果、人びとを画一的な意味の文脈に取り込んで管理下に置く動きが遍在化する一方、そうした現実を見直そうという気運は減退し、理念や理想の実現に向けて社会のあり方を議論する場であるはずの公共空間は形骸化しつつある。

この趨勢を後押しするのが、社会の方向性は自律した人たちの自由な行為から自生的に決まってくる、とするタイプの自由主義の興隆である。人びとの価値や意思が尊重される社会を目指そうとするよりは、それぞれの人に、自由社会で生きていく上で〈遅れ〉(春日 2007)をとらないよう「問題-解決」を迫る。いわば自由社会に適した個人を生み出す統治技術としての「自由」の広まりである。

これまで公共空間の危機に抗してその再生の方途を示すべく、熟議デモクラシー論や市民社会論などの政治理論が提起されてきた。しかし、それら理論は今日の「自由」の蔓延自体を問い質すよりは、むしろそれを前提に、自由社会に生起する対立を適正に処理するための作法を提示しようとする。そのため、そもそも社会のあり方を問題化し、話し合おうという情念を生み出すまではいかず、公共空間を刷新する道筋を提示できていない(五野井 2011)。

そうした政治理論の弱点は、人のあるべき姿を、他者とは区別された明晰な自己意識を持つ理性的存在としてきた西洋政治思想の伝統(岡野 2010)に帰着する。人間どうし、あるいは自然とのつながりの中で送られる日常生活には他者依存性や応答性や偶発性がはさまれ、そこでは周りに先立つ個人は成り立たない、という人間的生のあり様(=「間で営まれる生」)は脇に追いやられ、「問題-解決」に主体的に取り組む個人の存在が指図されてきた。さらには、その伝統は、デモクラシーは(自由で自律した個人からなる)西洋で生成発展し(伝統から解放されない未開人の住む)非西洋に伝播していく、とする進歩史観をも生じせしめてきた。

そこで、「間で営まれる生」の観察を通して人間存在のあり方を探究し、西洋近代の相対化に取り組んできた人類学の立場から、従来の「問題-解決」型の議論の見直しに寄与できないだろう



バティン(オラン・アスリの伝統首長)の家に飾られた1980年代後半の写真(左は当時のマレーシア首相、中央は州知事、右がバティン)。政府とのつながりはバティンの威信を高めることになった(信田敏宏撮影)。

か。こうした問題意識より、アジア・アフリカ地域の人たちの日常生活を起点に、議論の新次元を切り拓こうというのが本共同研究の主題である。

通常「デモクラシー」といえば、国家の政治運営と同一視されるが、研究会ではそれだけでなく、環境保護、先住民運動、地域開発といった、人びとの福利向上を目的とするさまざまな活動が取り上げられる。「間で営まれる生」には埋没せず、画一的な基準にそって自己研鑽に取り組むよう、人びとに働きかける諸活動である。

活動の対象となる人びとは、往々にしてそうした政治性に違和感や反発を抱くが、活動を進める側は、その違和感や反発を、福利向上の邪魔になる非合理的な態度と見なしがちであり、それらが議論の俎上にのせられることは稀である。そこで本共同研究では、そのズレが包み隠されることなく関係者の間で話し合われ、その結果に基づいて、人びとの価値や意思がより一層尊重される社会のあり方が討議されるような、これまでない公共空間の活性化を念頭に置いている。

研究会では、アジア・アフリカ各地の「後背地」(=対面的関係性の優勢な共住集団ないし地域社会、阿部 2007)が取り上げられる。そこを基盤に(地理的領域にしばられることなく脱領域的にも)展開される相互交渉的、かつ他



劣化した植生の回復は住民にとって最優先課題ではないため、住民自身による育苗場運営は円滑に進まなかった(チャド湖南岸にて、石山俊撮影)。

者依存性・応答性の大事にされる暮らしぶりを通して、明晰な自己意識で「問題-解決」に取り組むよう促す活動と、「間で営まれる生」のズレが明らかにされる。

たとえば、石山俊の取り上げる環境NGOは、チャドの乾燥地の住民を「環境意識が低く、土地劣化を引き起こす」存在と見なし、植林活動を通じた意識化を進めてきた。しかし砂漠化は、実際には諸要因が複雑に絡み合って生じ、どういふ帰結を生むのかも全面的に明らかでない。それにもかかわらず、砂漠化を「個人の意識の欠如から生まれる危機状況」と曲解した上で対策が進められるので、自然とともに生き、自然に左右される人びとの暮らしは、チャドの乾燥地対策をめぐる議論から排除されてしまう。

信田敏宏の調査するマレーシアのオラン・アスリ社会では、旧来の政治運営に反発する人たちの後押しもあり、指導者の間で権力闘争が絶えない。植民地時代から存続する統治制度、近年活性化した先住民運動や政党政治など、さまざまな仕組みや利害が併存・衝突する中を暮らす人びとは、自然と政治意識を高め、対面的関係が優勢な地域社会の中で自ずと政治に関わっていく。こうした生活感覚は、個人の合理的な思考能力から出発して、そこから政治運営のあり方を説こうとする政治理論では捉え切れない。

宮本万里によると、ブータンの近年の民主化政策では、世俗政治で国家と国民の媒介役であった僧侶の政治舞台からの退出が企図されている。そこには、国民一人ひとりが宗教の拘束から離れ、自由で自律した個人として善き生を追求する合理的態度を理想とする世俗主義の影響が見取れる。こうした考え方が広まれば、仏教を通して人間存在の不条理さに向き合い、それを受容してきた人びとの生活感覚が、私的な問題として政治の場から排除されかねない。

武貞稔彦が指摘するように、ダム建設によって住民移転が生じる場合、計画づくりは住民の「自己決定」を尊重して進められる。しかし実際は、日本やスリランカの事例が示すように、住民が自らの意志で立ち退き後の生活を設計するというよりは、事業主の説得に応じて、あるいは隣近所との関係性の中で身の処し方が定められる。移転者のそうした他者依存性を隠蔽せず、それに正面から向き合い、今後の移転政策のあり方を検討する必要がある。

以上の事例発表が示すように、福利向上のための諸活動をめぐる議論の幅を広げ、豊かなものにしよという本共同研究の社会的実践志向は、「間で営まれる生」を調査対象として客体化するのではなく、そこに入り込むことで追求される。「間で営まれる生」を支えてきた各地の文化的な仕組みや歴史的な蓄積に対する理解を現場で深め、その上で「問題-解決」型の思考に根差した従来の議論に代わる主張を、研究会の各メンバーがそれぞれの活動分野において展開する。

同時に「間で営まれる生」は閉鎖的・固定的ではなく、社会の動きを織り込みつつ伝達・再編され、多義的で混沌としている。したがって、人びとの生活世界に入り込むにつれ、複合的・流動的な暮らしが明らかになるので、「(社会との) 間で営まれる生」を言語で表現することが一筋縄ではいかなくなる。そこで、その複雑で動的な日常生活を踏まえつつ、「明晰な自己意識を持って事に当たろう」と訴える平板な主張の限界を露わにする。いわば、言語化不可能な「後背地的領域からの問いかけ」(青木 2009: 331)を行うのである。

ただし、自己統治の言説のグローバルな広まりに抗して、アジア・アフリカのローカルな文化を対置しようというわけではない。そうすると、先述の進歩史観を問題化するはずが、その進歩史観と同根の「西洋と非西洋」という二元論に陥ってしまうことになる。

「間で営まれる生」とは「人類の誕生以来つねに存在してきた人類社会の一部あるいは一側面」であり(阿部 2007: 359-360)、何もアジアやアフリカでしか見られないわけではない。逆に、それからの離脱を促す「問題-解決」型の思考は地球の隅々に浸潤し、その地その地で、さまざまな活動を通して世界各地の人に〈遅れ〉をとらないよう迫っている。そうした動きに追い立てられるよりは、「間で営まれる生」を大事にしたい。そうした価値や意思が大事にされる社会を目指そう。そうした連帯意識が、特定地域を超えて、同時代に(さまざまな形で)生きる世界中の人たちの中で喚起されるような議論を探究できればと考える。



静岡県井川ダム(1957年竣工)による移転集落。現在も移転当時同様、約20世代が暮らし続けている(武貞稔彦撮影)。

【参考文献】

- 青木恵理子 2009 「ネオリベラルな現在において人類学のできること」『文化人類学』74(2): 316-337。
阿部年晴 2007 「後背地から……」阿部年晴ほか編『呪術化するモダニティ——現代アフリカの宗教的实践から』pp. 349-390 風響社。
岡野八代 2010 「つながる・つなぐ——複数の、具体的な個人の間、偶発的な集まりからの政治」岡野八代編『生きる——間で育まれる生』pp. 21-57 風行社。
春日直樹 2007 『〈遅れ〉の思考——ポスト近代を生きる』東京大学出版会。
五野井郁夫 2011 「ラディカル・デモクラシーの政治と公共空間の創出」斎藤純一編『支える——連帯と再分配の政治学』pp. 133-169 風行社。

まさき かつひこ

清泉女子大学地球市民学科准教授。専門は開発研究、文化人類学。著書に『支援・発想転換・NGO——国際協力の「裏舞台」から』(新評論 2010年)、*Power, Participation, and Policy: The 'Emancipatory' Evolution of the 'Elite-Controlled' Policy Process* (Lanham, MD: Lexington Books, 2006)、共編著に『東南アジア・南アジア 開発の人類学(みんぱく実践人類学シリーズ6)』(明石書店 2009年)。